

第30回夏期福音特別集会（1）（伊東）

躓く石

——イザヤ書第7～9章——

1983年7月22日

小池辰雄

聖書66巻の縮図 「シエヤール・ヤーシユープ」 キリスト神秘の世界 聖と信の音信 逆徴
 「インマヌエール」と「ベニエール」 「マヘル・シャルル・ハシ・バズ」 反逆と愛国 ゼロⅡ
 無限大 きよき避所・躓く石 ひとりの嬰兒 神さまの頑固さにはかなわない 祈り

【イザヤ7】

1ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズのと看、アラムの王レヂンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてエルサレムを攻めしがついに勝つことあたわざりき。2ここにアラムとエフライムと結合なりたりとダビデの家につぐる者ありければ、王のこころと民の心とは林木の風にうごかするが如くに動けり。

3その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シャルヤシユブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池の樋口にゆきてアハズを迎え、4これに告ぐべし、なんじ謹みて静かなれ、アラムのレヂン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの燼余りたる煙れる片柴のごとし。懼るるなかれ、心をよわくするなかれ。5アラム、エフライム及びレマリヤの子なんじにむかいて悪しき謀ごとを企てていう、6われらユダに攻め上りて之をおびやかし我等のためにこれを破りとり、タビエルの子をその中にてて王とせんと。7されど主エホバ云いたまわく、この事おこなわれずまた成ることなし。8アラムの首はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなり。エフライムは六十五年のうちに敗れて国をなさざるべし。9またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり。若しなんじら信ぜずばかならず立つことを得じと。

10エホバ再びアハズに告げていたまわく、11なんじの神エホバに一つの予兆をもとめよ、或はふかき処あるいは上のたかき処にもとめよ。12アハズいいけるは我これを求めじ、我はエホバを試むることをせざるべし。13イザヤいいけるは、ダビデのいえよ請うなんじら聞け、なんじら人をわずらわしこれを小事として亦わが神をも煩わさんとするか。14この故に主みずから一



の予兆^{しるし}をなんじらに賜うべし。視よおとめ孕^{はら}みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。¹⁵かれ悪をすて善をえらぶことを知るころおいにいたりて乳酥^{にゅうそ}と蜂蜜とをくらわん。¹⁶そはこの子いまだ悪をすて善をえらぶことを知らざるさきになんじが忌^いみきらう両^{ふたり}の王の地はすてらるべし。¹⁷エホバはエフライムがユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日を汝となんじの民となんじの父の家とにのぞませ給わん。是アッスリヤの王なり。

¹⁸其日エホバ、エジプトなる河々のほとりの蠅をまねきアッスリヤの地の蜂をよびたまわん。¹⁹皆きたりて荒たるたに岩穴すべての荆棘^{いばら}すべての牧場^{まき}のうえに止まるべし。

²⁰その日主はかわの外^{むち}より雇えるアッスリヤの王を剃刀^{かみそり}として首と足の毛とを剃りたまわんまた髯^{ひげ}をも除きたもうべし

²¹その日人わかき雌牛ひとつと羊ふたつとを飼いおらん。²²その出すところは乳おきによりて乳酥^{にゅうそ}をくらうことを得ん。すべて国のうちに遺れるものは乳酥と蜂蜜とをくらうべし。

²³その日千株^{ちもと}に銀一千の価をえたる葡萄ありし処もことごとく荊^{いばら}と棘^{おとどろ}はいづべし。²⁴荊とおどろと地にあまねきがゆえに人々矢と弓とをもて彼処にゆくなり。²⁵鋤^{すき}をもて掘りたがえしたる山々もいばらと棘のために人おそれてその中にゆくことを得じその地はただ牛をはなち羊にふましむる処とならん

【イザヤ8】

¹エホバ我にいたまいけるは、一つの大なる牌^{ふだ}をとり、そのうえに平常^{よのつね}の文字にてマヘル・シャルル・ハシ・バズと録^{しる}せ。²われ信実^{あかし}の証者^{あかしびと}なる祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤをもてその証^{あかし}をなさしむ。³われ預言者の妻にちかづきしとき彼はらみて子をうみければ、エホバ我にいたまわく、その名をマヘル・シャルル・ハシ・バズと称えよ。⁴そはこの子いまだ我が父わが母とよぶことを知らざるうちに、ダマスコの富とサマリヤの財宝^{たから}はうばわれてアッスリヤ王のまえに到るべければなり。

⁵エホバまた重ねて我につげたまえり云く、⁶この民はゆるやかに流るるシロアの水をすててレヂンとレマリヤの子とをよろこぶ。⁷此^{これ}によりて主はいきおい猛^{たけ}くみなぎりわたる大河の水をかれらのうえに堰^{せき}入れたまわん。是はアッスリヤ王とそのもろもろの威勢^{もも}にして、百^{もも}の支流^{えだかわ}にはびこり、もろもろの岸をこえ、⁸ユダにながれいり、溢れひろがりてその項^{うなじ}にまで及ばん。インマヌエルよ、そののぶる翼はあまねくなんじの地にみちわたらん。

⁹もろもろの民よさばめき騒^{さわ}げ、なんじら摧^{くだ}かるべし。遠きくにぐにの者



よき腰におびせよ、汝等くだかるべし。腰に帯せよなんじら摧かるべし。
10 なんじら互いにわかれ、ついに徒勞ならん。なんじら言をいだせ、遂にお
こなわれじ。そは神われらとともに在せばなり。11 エホバつよき手をもて如此
われに示し、この民の路にあゆまざらんことを我にきとして言い給わく、
12 此民のすべて叛逆となうるところの者をなんじら叛逆となうるなかれ。
彼等のおそるるところを汝等おそるるなかれ惜くなかれ。13 なんじらはただ
万軍のエホバを聖としてこれを畏みこれを恐るべし。14 然らばエホバはきよ
き避所となりたまわん。然どイスラエルの両の家には躓く石となり妨ぐる磐
とならん。エルサレムの民には網罟となり機檻とならん。15 おおくの人々こ
れによりて蹶きかつ仆れやぶれ網せられまた捕らえらるべし。16 証詞をつか
ね律法をわが弟子のうちに封べし。17 いま面をおおいてヤコブの家をかえり
み給わずといえども、我そのエホバを待ちそのエホバを望みまつらん。……

【イザヤ9】

1 今くるしみを受くれども後には闇なかるべし。昔はゼブルンの地ナフタ
リの地をあなどられしめ給いしかど、後には海にそいたる地ヨルダンの外
地ことくに人のガリラヤに榮をうけしめ給えり。2 幽暗をあゆめる民は大い
なる光をみ、死蔭の地にすめる者のうえに光てらせり。……6 ひとりの嬰兒
われらのために生まれたり。我儕はひとりの子をあたえられたり。政事はそ
の肩にあり、その名は奇妙また議士また大能の神、とこしえのちち、平和の
君となえられん。7 その政事と平和とはましくわわりて窮りなし、且ダビ
デの位にすわりてその国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをも
てこれを立て、これを保ちたまわん。万軍のエホバの熱心これを成したもう
べし。……

●聖書66巻の縮図

集会というものは、我々には決して習慣ではなくて、いつも非連続の連続、一回限りと
いう気合でやっているわけです。そして、必ずそれは前進させられる。いろいろご事情も
おありでしょうが、集会に来られない方のことを思うと、私は心が本当に痛む。私たちは
神第一、福音第一でとりくんでいきたいと思っています。

全聖書66巻のうち39巻が旧約で、27巻が新約ですが、その旧約の中でただ一書を選べと
言われたら、私は文句なしにイザヤ書を選びます。イザヤ書全66章がちょうど聖書66巻を
縮図にしたような驚くべき内容です。壮大雄渾、深刻なもので、イザヤ書にかなうものは
ありません。黙示録もイザヤ書に非常にこたえているわけです。福音書はまた別な意味で
ユニークなものです。これは何といっても、キリストの直かのものですから。イザヤ書の



中に福音が隠れている。「隠れています神」という言葉がイザヤ書の中にありますが、正に福音がその中に全部隠されている。

では、イザヤ書7章から少しづつ必要なところを読んでいきましょう。

1 ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズ^{のぼ}のとき、アラムの王レヂンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてエルサレムを攻めしがついに勝つことあたわざりき。²ここにアラムとエフライムと結合^{むすびつら}なりたりとダビデの家につぐる者ありければ、王のこころと民の心とは林木の風にうごかざるが如くに動けり。

預言者イザヤはウジヤ(アザリヤ)、ヨタム、アハズ、ヒデキヤという四代において預言しているわけです。

シリヤ(アラム)王レヂンがイスラエル(エフライム)王ペカ(前737～732年)を立てて、シリヤ・イスラエル連合軍を作り、ユダ王アハズ(前735～715年)を屈伏せしめて、連合軍を構成し、アッシリヤに反抗しようと謀った。アハズは恐れて、アッシリヤに貢^{みつぎ}を贈って、助けてくれというわけです。アッシリヤ王のテグラテピレセルというのはもちろん強いですから、シリヤのレヂンをやっつけてしまう。ダマスコが陥落したのが前722年です。そういうような背景です。

●「シエヤール・ヤーシューブ」

シリヤ・イスラエル軍がエルサレムを攻めて来たのは紀元前735年から734年にかけてのことですが、その時エホバがイザヤを呼んで、アハズ王にかく告知せよというわけです。3節の「その時」というのは前734年のことです。

3 その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シヤルヤシュブと共に

「シエヤール・ヤーシューブ」というヘブライ語ですが、「シエヤール」というのは「遺されたる者」、「ヤーシューブ」というのは「帰りきたらん」ということです。

「シューブ」

という言葉は非常に大事な言葉で、

「帰る、戻る、回帰する」

という意味です。預言者がしょっちゅうこの「シューブ」という言葉を使っている。非常にたくさん出てくる。

「悔い改め」という訳は――ドイツ語では「トウート・ブッセ」(懺悔をせよ)というが――ギリシヤ語からの訳としてはいいのですけれども、もともとキリストはギリシヤ語でしゃべったのではない。ヘブライ語だから、キリストが仰ったときには、

「シューブ」(汝ら、立ち帰れよ)



と言われたんです。

「全存在で神・キリストに立ち帰る」

ことが本当の「悔い改め」です。心でもつてただ「悔いて改める」という、そんな心理的なことではない。この全存在ということが大事です。

プロテスタントは、

「信仰によつて義とされる」

ということがお題目になつてしまつてゐる。「信仰」という言葉もすでに躓きになる。私は「躓きの石」みたいなことを言いますが、言わざるを得ないんです。もう本当の意味で、預言者や使徒たちの直々の次元と同質の次元に食いついていかなければ、立ち帰つていかなければダメです。その点で全存在なんです。「信仰と行為」ではない。「信行一如」の全存在的な在り方が本当の信です、それが現うつひです。信即現なんです。これほど素晴らしい現はない。自分の子供の名前に、

「シエヤール・ヤーシューブ」(「遺れる者(遺される者)は帰りきたらん」)

という素晴らしい名前をつけた。あなた方はみな「遺されている者」です。落ち穂拾いの遺されたる者です。神さまに、キリストに拾われつつあるわけです。それが神の国を本当に築いていく。福音を拒む者は自ら審いているだけのはなしです。神さまは審こうとしてない。拒む者が自分で審判を招いている。

旧約でただ一つの言葉を覚えろと言われたら、私はこの「シュラブ」という言葉を言います。「立ち帰る」こと。神の中に帰るということを更にもうひとつ強くいえば、「帰入」ということです。帰り入るんです。そして、「祈入」、祈り入る。

「祈りも全存在でキリストの中に投げ入れる祈り」

です。ただ大きな声を出すことではない。黙っていた方がいい。全存在で投げ入れるのが本当の祈りです。そうしたら、俄然と力がくる。非常に簡単です。「ワッショイ、ワッショイ」ではない。黙っていてもの凄い世界に入ってしまう。そういう帰入、帰り入ること、回帰することです。これが福音の一番大事な在り方です。これが本当の前進なんです。だから、

「シェヤール・ヤーシューブ」
(遺れる者は帰りきたらん)

というのは素晴らしい名前です。汝は神さまのために遺されている者だという。「帰りなんいざ」(陶淵明の帰去来辞)という詩があるけれども、正に「帰りなんいざ」なんです。

●キリスト神秘の世界

3……今なんじと汝の子シャルヤシユブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池かみのいけの樋口にゆきてアハズを迎え、

「布をさらす野の大路」というのはひとつの地名的な言い方です。貯水池が上と下にあつて、上の方の貯水池の樋口から水がでていくわけだ。



4 これに告ぐべし、なんじ謹みて静かなれ、アラムのレヂン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの^{もえのこ}燼余りたる煙れる片柴の^{はしば}ごとし。懼るるなかれ、心をよわくするなかれ。

「懼るるなかれ、心をよわくするなかれ」

というと、何か命令や禁止のように思うでしょ。しかし、そうではなく、

「懼れはないぞ、弱くはならんぞ」

ということです。神さまの言葉は全部、実力をもって裏付けられています。自分で頑張ろうとしたってダメですよ、くたびれてしまうから。私はなぜくたびれないかというと、自分で頑張らないから、くたびれないんです。よく「がんばれ」と言うけれども、私は頑張らない。

よく「お任せします」なんて祈るね。こっちはボヤツとしていて、「お任せします」ではない。「お任せ」というのは、自分自身を投げ入れることが「お任せ」なんです。

「御意を成させたまえ」

というのは、

「どうぞこの私をお使いください。私を通して成してください」

ということ。キリストは仰らなかつたけれども、

「どうぞ、私を通してやってください」

ということです。全部、このような一人称と二人称の関わりの世界です。

関わりが今度は「一如」の世界に入る。汝と我が、一如の世界です。本当の神秘と信仰は「二つ」の世界なんです。ルターの『キリスト者の自由』を読んでごらん。彼も、一つになっている世界を書いている。ルターを読みなおせと言いたい。パウロだってそうです。

「パウロは神秘家である」

と、ダイスマンもシュヴァイツァーもはつきり言っている。キリスト、神秘の世界、キリストと本当に一つとなっている世界です。罪びとが一つになれるんです。キリストは^{きよ}潔き人と一つになっているのではない。罪びとと一つになってくださる世界なんです。これが贖いの愛です。だから、

「懼るるなかれ」

とは、

「そんなものはちよつとも恐くない、懼れることはないよ」

ということですよ。

●聖と信の音信

5 アラム、エフライム及びレマリヤの子なんじにむかいて悪しき^{はかり}謀ごとを企てていう、⁶われらユダに攻め上りて之をおびやかす我等のためにこれを破



りとり、タビエルの子をその中にたてて王とせんと。

そんなことを考えている。そんなことは心配いらん、というわけです。

⁷されど主エホバ云いたまわく、この事おこなわれずまた成ることなし。

⁸アラムの首はダマスコ、ダマスコの首はレデンなり。エフライムは六十五年のうちに敗れて国をなさざるべし。⁹またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり。若しなんじら信ぜずばかならず立つことを得じと。

「若しなんじら信ぜずばかならず立つことを得じ」

とある。この言葉は気をつけてください。イザヤという預言者は、人間の側では信が何であるかということ徹底的に説きかつ実践した預言者なんです。そして、神のことは「しょうじや聖者」としてはつきりと称えていた預言者です。「聖と信」、この音信は第一イザヤです。

「汝ら(神を)信ぜずば」

というのは、

「もし、神さまをアーメンとしないならば、神さまをまこととしないならば、神さまをほんものだとしないならば」

ということです。人間はみなウソツパチだけれども、神さまは本ものです。

「神さまを本ものとしなければ、まことにお前たちはもちこたえないぞ」

という。「たつことをえず」というのは「もちこたえない、持続できない」ということです。

「神さまをまこととしないと、くずれてしまうぞ、持ちこたえないぞ」

と。その「まこととする」という字と「もちこたえる」という字が同じ字なんです。

「信ぜずば、持ちこたえないぞ」

ということ。信ずることは持続することなんです。持続しないような信仰は信仰ではないということになる。

「ちよつと昨日は信じたけれども今日はぐらついた」

なんてのは信仰でもなんでもない。生涯を貫いていくかということ。内村鑑三先生が、

「30才以下の青年の信仰なんか当てにしない。まず35才くらい続かなければダメだ」

というようにどこかで言ってらっしゃった。ただ燃えたってダメだよ、どんな嵐がきても雨が降っても、その火は消えない持続性をもった火でなければ。そういった燃えかたでなくては。

信仰とは正にそのような持続的な事態である。存在的に持続していく。だから、神さまを、友だちをどこまでも裏切らない。相手がどうなろうと、こっちは変わらないぞと。キリストは今日も明日も次の日も永遠に変わらない。キリストは常に同一である。そういう不変、不動な事態を「信」という。そうでなかったら、信ではない。



●逆徴

10 エホバ再びアハズに告げていいたまわく、
神さまがイザヤに言わせて、

11 なんじの神エホバに一つの予兆^{しるし}をもとめよ、或はふかき処あるいは上のた
かき処にもとめよ。

陰府でもまた天上でもどちらでもいいから徴を求めよと。

12 アハズいけるは我これを求めじ、我はエホバを試むることをせざるべし。
と、なかなかもつともらしいことを言った。

「ユダヤ人は徴を求め、ギリシヤ人は智慧を求めるが、それはダメだ」

とパウロが言った。いわゆる奇蹟的な徴を求める。キリストも「試みてはいかん」という
ことを旧約の言葉から引用して仰った。ここでは

「我はエホバを試むることをせざるなり」

と、なにか預言者が逆にやつつけられたようなことになっている。

13 イザヤいけるは、ダビデのいえよ請うなんじら聞け、なんじら人をわす
らわしこれを小事^{ちいさし}として亦わが神をも煩わさんとするか。

「人」というのはイザヤのことです。イザヤの言っている「予兆^{しるし}」はご利益的な徴^{しるし}ではない。
逆説的に言うならば、聖書の宗教は徴の宗教であると逆に言える。「逆徴」とでもいいいたい。
逆さまの徴です。徴中の徴はイエス・キリストです。また、キリスト以外に本当の徴はな
いと言ってもいいくらいです。キリストは神さまの現象体だから。

「我を見し者は父を見しなり」

という、そういうもの凄いしるしなんだ。「我々は証者たれ」という。それは

「キリストの徴となれ」

ということ。その人を通して徴が現れる。人の魂が救われたり、病が治ったりする。
そういうのがみな証者だ。皆さん一人ひとりがいろいろな徴となっていくわけです。キリ
ストの生命を生命していれば、必ず現れる。

●「インマヌエル」と「ベニエール」

14 この故に主みずから一の予兆^{しるし}をなんじらに賜うべし。視よおとめ孕^{はら}みて子
をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。

「おとめ」というのは何も「処女」に限らない。「若い女性」も言いますから。この場合は
特に処女という意味ではないでしょう。但し、これがキリストの預言として受けとられて
いるところに、また別な意味が出てくるわけです。

「その名をインマヌエルと称うべし」

とはイザヤを通して、



「イスラエルはインマヌエル（神われらと共に）という民にならなければダメだ。選
びの民といいながら、ちつともインマヌエルではないではないか」

ということをおうとしてゐるわけです。「インマヌエル」とは、

「神われらと共に」

ということです。旧約のヘブライ語には、

「ベニエール」（神われらの中に）

という言葉がない。「の中に」という世界は新約に来て、本当になる。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

ということ。「神のうちに」ということもパウロが言っている。相互内在の関係です。外接
円ではなくて、内接円にならなくてはダメです。十字架という門を通つて、キリストとい
う円の中に入つてしまわなければ。

「インマヌエール」（神われらと共に）

「ベニエール」（神われらの中に）

のこの画面が大事なんです。「インマヌエール」は、人格的な関係です。「ベニエール」は、霊的
な関係です。霊的な関係になると「うちに」になる。聖霊が入ってくると、そういうこと
になる。聖霊が来ないうちは、「うちに」ということが言えない。だから、「霊的人格」とい
うのが非常に大事です。私はただ神秘性を強調しているわけではない。「霊的人格」という
言葉で「うちに」と「共に」と両方を表す。

「汝らは『神さまは我らと共に』という民になれ」

というのが、この時の徴なんです。啓示であり、またイザヤの祈りなんです。これがキリ
ストの預言になったとかならなかつたとか、ということはどうでもいい。その時には確か
にそういうようにして示された。

「お前たちがインマヌエールにならなければしょうがないんだ」

と。そして、本当のインマヌエールが後から出てきた。それが「おとめ」からであろうと
何であろうといいですよ。

²¹その日人わきき雌牛ひとつと羊ふたつとを飼いおらん。²²その出すところ

の乳おおきによりて乳酥にゅうそをくらうことを得ん。すべて国のうちに遺れるもの

は乳酥と蜂蜜とをくらうべし。

ということは、人口がだいぶ減つてしまうわけだ。ここにも「遺れるもの」という言葉が
ある。「遺れるもの」は少ないんです。クリスチャンは少ない。本もののクリスチャンはな
おさら少ない。キルケゴールが、

「本もののクリスチャンは天才よりも少ない」

と言った。万人が本もののクリスチャンになれる。ところが、本ものが、現実はいかに少
ないかということです。



●「マヘル・シャルル・ハシ・バズ」

8章にいきます。アッシリヤがやってきて、アラムとエフライムをやつつけてしまう。

「エホバ我にいたまいけるは、一つの大いなる牌^{ふだ}をとり、そのうえに平常^{よのつね}の文字にてマヘル・シャルル・ハシ・バズと録^{しる}せ。」

「マヘル・シャルル・ハシ・バズ」とは、

「分捕りものは速やかに、略奪ものはすみやかに」

という意味です。これは

「アッシリヤがやつつけに来て、どんどんやつつけられるぞ」

という意味です。さっきの「遺れる者は帰りくる」というのは、イスラエルの民がいかに遺れる者にならなくてはいかんかということで、こつちは、逆に彼らはアッシリヤにどんどんやつつけられてしまうぞという名前です。そういう歴史的な現実からきているところの名前です。

²われ信実^{あかし}の証者なる祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤをもてその証^{あかし}をなさしむ。³われ預言者の妻にちかづきしとき彼はらみて子をうみければ、

エホバ我にいたまわく、その名をマヘル・シャルル・ハシ・バズと称えよ。⁴そはこの子にまだ我が父わが母とよぶことを知らざるうちに、ダマスコの富とサマリヤの財宝^{たから}はうばわれてアッシリヤ王のまえに到るべければなり。

そして、今度はユダの国がやつつけられる番になる。その時は、アモスでなくて、ヒデキヤになる。ヒデキヤは紀元前721年から693年。721年が有名なエルサレムの包囲になるわけです。アッシリヤの大軍がやってきて包囲攻撃をする。センナケリブ王がやってくるわけです。

⁵エホバまた重ねて我につげたまえり云く、⁶この民はゆるやかに流るるシロアの水をすててレヂンとレマリヤの子とをよろこぶ。⁷此^{これ}によりて主はいきおい猛^{たけ}くみなぎりわたる大河の水をかれらのうえに堰^{せき}入れたまわん。

これはアッシリヤ軍がやつつけることの詩的な表現です。

是はアッシリヤ王とそのもろもろの威勢とにして、百^{もも}の支流^{えだかわ}にはびこり、もろもろの岸をこえ、⁸ユダにながれいり、溢れひろがりてその項^{うなじ}にまで及ばん。

インマヌエルよ、そののぶる翼はあまねくなんじの地にみちわたらん。

アッシリヤ軍ののべる翼があまねくなんじの地にみちわたらん。だから、気をつけろ、もう切迫しているぞと。

まるで、「ヘタするとソ連がやってくるぞ」ということと同じことだ。預言書というのは非常に我々の現実いろいろな暗示を与えます。現代は、本当に預言書を読むと、イザヤのような信仰を貫き持続していかないならば、いい加減な信仰では持ちこたえられない。いい加減な軍備なんかしたってダメです。逆にやつつけられる。アメリカに頼っていたら



ダメです。全く日本という国は正直、おめでたいね。

神・キリストに在って生きるといふことがどのようなことであるか。ということは、もう、十字架道です。

●反逆と愛国

ところが、今度は逆に、預言者は言う。

9 もろもろの民よさばめき騒げ、

ちようと、詩篇2篇みたいだ。いくら騒いだって、神さまにはかなわないよということですよ。

なんじら摧^{くだ}かるべし。遠きくにぐにの者よきけ腰におびせよ、

いくらでも武装せよ、ということ。

汝等^{くた}くだかるべし。腰に帶せよなんじら摧^{くだ}かるべし。

神さまにやつつけられるぞと。

10 なんじら互いにわかれ、ついに徒^{むなしく}勞ならん。

いくらでも計画をやってみろ、ついに徒勞とならんと。今のヨーロッパでもアジアでも中東でも大変だ。みな神さまを忘れて、ただソ連とアメリカの強さばかりを問題にしている。

なんじら言をいだせ、遂におこなわれじ。そは神われらとともに在^{いま}せばなり。

「神われらとともに在せばなり」と言つてイザヤが、本当にその現実だから彼らは碎かれると。しかし、「神われらとともに」という生き方をしなかつたら、今度は逆にこつちが碎かれるというわけです。預言者の言葉は、

「敵がやって来るぞ、恐れるな。今度は向こうが碎かれるぞ、本当に信を貫くならば」ということです。

11 エホバつよき手をもて如此^{かく}われに示し、この民の路にあゆまざらんことを我にさとして言い給わく、

みんながやっているそんな道は歩まざらんことを我にさとして言いたまわく、

12 此民のすべて叛逆となうるところの者をなんじら叛逆となうるなかれ。

彼等のおおるるところを汝等おおるるなかれ^{おの}憎^{にく}くなかれ。

せつかくアッシリヤと仲良くしてエジプトにでも向おうと思つて、友好関係を結ぼうとするところが、イザヤは、

「そんなことはダメだそれは反逆だ愛国ではないぞと言うが、それはその彼らの言

うその反逆を反逆と思うな」

と。エレミヤの場合はまたその逆になる。バビロンに手向かうなど。そうすると、バビロンに対してはエジプトと一緒に戦わなくてはいかんというのが愛国心だと思つたが、エレミヤはそう言わない。エジプトに依り頼むな。神さまに依り頼んで、バビロニヤとはそういった戦いを構えるなど。そうすると、エレミヤの方は逆に売国奴みたいと思わ



れた。その時その時で預言者の立場というものは逆になって、一般の判断とは逆になる。

それはみんな躓く。躓きの石だ。最大の躓きの石はキリスト。だから、十字架にかけられた。内村先生が非戦論を唱えて、始めは内村先生だって好戦的だったんだよ、日清戦争のときは、日露戦争の前、三六年に、「戦つてはいかん」と。まあ大きな犠牲を払って戦に勝つたけれども、どうですか、満州は全部また元のとおり。内村先生の預言が今になってわかった。

「こんなことをしていれば、必ず日本はいっぺんひっくり返るぞ」

と、内村先生の本の中にありますよ。

●ゼロ＝無限大

彼等のおそるるところを汝等おそるるなかれ^{おの}。13 なんじらはただ

万軍のエホバを聖としてこれを畏^{かしこ}みこれを恐るべし。

神さまの前に平伏せと。神さまの前に平伏して、自分が本当に無になると――私はそういう平伏しを「無者」と言っているんです――何ものでも無くなる。

ある作曲家が私と話していて、

「先生は大学教授というけれども、ちつとも教授らしくないし、何か他に肩書があるかしらんけれども、先生みたいに子どもみたいな、わけのわからない人は見たことがない」

「そうだよ。僕は何ものでもないよ」

と私は言う。それで無の話を少ししてやった。何ものでもなくなると、無限無量なものが入ってくるから、もう本当に有り難くてしょうがない。

「ゼロ＝無限大」

ということ。これをはつきりと表したのが主イエス・キリストだから仕方がない。だから、キリストのことを無者と言っている。世界中で誰もキリストのことを無者と言わないですよ。ドイツ人やイギリス人は、この「ニッヒツ」だの「ナッシング」だのと聞いたら、すぐ「虚無主義」だと思う。「ナンビーイング」というやつだ。私は何ものでもないし、自分の信仰なんていうのも私してない。

「信仰うすき者よ」

と言うと、みんな信仰があつくなくなりたくなる。キリストがまた躓きの石だから、ああいうことを仰る。そうすると、

「これは信仰をあつくしなくてはいいかん」

なんて。しまいにくたびれてしまうよな。私は自分の信仰なんてものはあてにしない。あてにするのはキリストだけです。何ものでもない。

この部屋の中の空気は誰か見えますか。空気は見えないでしょ。空気を見ようとすると、向うの柱が見えてしまう。空気を見ようとすると、私の顔が見えるかもしれない。ところが、



空気は見えないけれども、充滿している。皆さんの中に入っている。無の姿が無量の内容を持つている。気がそうです。空気の気が。霊が。風が。そういうのを冥想してごらん。だから、もうしよつちゅう申し上げている。キリストは、

「なんぞ、我を善きと言うか。神さまのほかに善きものなし」と。ところが、

「我を見しものは父を見しなり」

と、なぜ言えたか。その「絶対矛盾の自己同一」ということ。

「絶対矛盾の自己同一」

というのは、西田先生が言ったけれども、それはキリストがそれをちゃんと実証している。つしやる。

「なんじの信仰なんじを救えり」

とキリストが言われると、

「私の信仰はまだ弱いから、なかなか救いにいかない」

なんて思う。そうじゃないよ。「なんじの信仰」というのは、

「お前が100%に私を受けとつたことが、私に頼んだことが、救いとなったよ」ということなんだ。キリストはそういうことです。

「わかんないけど、信じておきましょう」

なんて、そんなものは信仰でも何でもない。

●きよき避所・躓く石

14 然らばエホバはきよき避所となりたまわん。

ええ、かしこみ畏れば。避所というと、なにか逃げ隠れるようだけれども、避所の中に、キリストの中に、神さまの中に入ってしまうと、ここはもの凄い世界だから、力が入る。

安息日というと、みんなボヤツとしてしまったらダメだよ。安息日というのは、集会の中に入ってきて、一緒にキリストの中に入ることが集会なんだ。だから、安息日には力を得るために来ているんだ、みんな。それを、安息日をいい加減にするから、だんだんおかしくなってしまうよな。誰々がいるからどうの、誰がどう思うからどうのと、人のことなんてどうだっていいよ、そんなことは。何を気にしているか。自分自身も何もなくなってしまった。ちよつと説明できないですよ、私は正直。私は何ものでもない。本当にそうだから。もう私は異言が出そうになる。

然どイスラエルの両の家には

イスラエルとユダのこと。

躓く石となり妨ぐる磐とならん。

このエホバは。そして、かくしてエホバによって行動せしめられ、ものを言わせられてい



る預言者は。

「八万四千の法を説いたけれども、私はひとつも説かなかったよ」

と、なぜお釈迦さんが言ったかという、そのことです。

16節におもしろいことが書いてある。

¹⁶ ^{あかし}証詞をつかね^{おきて}律法をわが弟子のうちに封^{とす}べし。

こういった預言の証、律法^{おきて}を閉じ込めておけと。イスラエルはみんなしょうがない。お前の本当の弟子たちの中にこれを伝えておけと。

皆さんは、私の弟子でも何でもないです。私は皆さんの兄弟姉妹の一人です。まあ仕方がないから、代表者だの団長だのという名前があつたって、私はちつともそんなことは何とも思っていないから。そんなことを思っている上だったら、私はおかしいことになつてしまう。僕にすぎない。

とにかく、私みたいなものを通して、あなた方に伝えたいところの音信、聖書の証。あるときは医者に見離されたようなものが一瞬に治つたりする。これはみな徴です。そういったのを事実をもつて皆さんがお互いさまに受け継いでいくわけです。

「内村先生がこうだった、藤井先生がこうだった、手島先生がこうだった」

ではダメだ。自分たちが新しい手島になつていかなければ。真似したってダメだ。神さまは真似事が嫌いなんだ。神さまは一人びとりを天下一品につくつていらつしやる。それが大交響楽となつていくんだから。それで私は皆さんの一人びとりを本当に尊重するんです。そこにキリストの不思議な音がそれぞれ発してください。お互いにただそれをもつて聖名を称えていきましよう。

だから、「閉じ込めておけ」というのはひとつのミステリオンです。奥義です。奥義の世界。パウロが「奥義」「ミステリオン」という言葉をよく使った。皆さんの中に奥義が聖霊の示しによつて伝えられていく。蓄積していく。それが時あつてか爆発してくる。学ぶ時にはしっかり学んでおきなさい。爆発する時がくるから。

17 ^{みかお}いま面をおおいてヤコブの家をかえりみ給わずといえども、我そのエホバを待ちそのエホバを望みまつらん。

「待ち」「望み」は同じような字です。「忍耐」という言葉がある。忍び待つと書く。運命環境がどうあつても、絶対にへこたれませんか。環境や運命がおかしくなったら、逆に強くされていきます。それが本当の信の世界です。ある時は運命環境が変えられていく。また、変えていく。しかしながら、どうであつても、相対的現実の奥に絶対的な現実が進んで行く。そういう次元に入ったら、もう行き詰まるということが絶対にありません。行き詰まったと思つたら、逆におそろしいことが起きてくる。絶対に失望してはいかん。いわんや絶望してはいかん。いろいろな人に誤解されたり、ひどい目に合わせられたり、小さい人たちで気の毒な人も時々いるよ。しかし、それで頭がおかしくならないように。



「ようし、これは神さまに愛されている証拠だ」

と、進んでいかなくては。キリストの愛は何ものよりも強い。パウロがローマ書8章で絶叫している。本当に絶叫だよ、ローマ書8章のうしろのあの数節は。

●ひとりの嬰兒

9章にいきます。ここはまた新約の方になかなかつていくような言葉なんだ。預言書というのは必ずしも時代順にも書いてない。預言の断片が妙な編纂になって、時代が先へ行ったり遅れたりいろいろなことになる。なかにはイザヤの言葉でないものも入っている。私はそんなことをいちいち学問的に言いません。

1 今くるしみを受くれども後には闇なかるべし。昔はゼブルンの地ナフタ

リの地をあなどられしめ給いしかど、

「昔し」というのは、さつき言った紀元前734年のことです。「ゼブルン」というのはガリラヤの少し南の方だ。「ナフタリ」もガリラヤの北の方。アッシリヤの王さまテグラテピレセルがやって来た。けれども、

後には海にそいたる地

「海」というの地中海です。

ヨルダンの外の地

これがナフタリ。

ことくに人のガリラヤに栄^{さかえ}をうけしめ給えり。

みんなこれはガリラヤ方面のことを言っている。それはアッシリヤにやつつけられたけれども、また復興するようなことを言っている。

2 幽暗^{くらき}をあゆめる民は大いなる光をみ、死蔭^{しかげ}の地にすめる者のうえに光てらせり。

これはマタイ伝4章に出ている有名な句です。希望が湧いてきた。滅びからまた復活してきた。大事なのは6節以下です。

6 ひとりの嬰兒^{みどりご}われらのために生まれたり。

妙なことが書いてある。これはメシヤのしるしです。

我^{われら}儕^{みどりご}はひとりの子をあたえられたり。政事^{まつりごと}はその肩にあり、その名は奇妙また議士また大能の神、とこしえのちち、平和の君となえられん。

「義士」とは智者のこと。最大級の言葉が使っている。これはマタイ伝28章に出てくる。コリント前書15章にも。「平和の君」という言葉はミカ書5章にも出ている。

7 その政事^{まつりごと}と平和とはましくわわりて窮^{かき}りなし、且ダビデの位にすわりてその国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをもてこれを立て、

「公平と正義」というのは、例の「ミシユパートとセデック」という字で、しょっちゅう出



てくる言い方です。正しく審くことが「公平」なんです。本来は「正しき審判」という字です。「正義」は「義」という「セデック」「セデカー」という言い方です。「これ」というのは「王位」です。

これを保ちたまわん。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。

今日はそこまでですけれども、忽然としてキリストの預言みたいなきことが出てきている。

●神さまの頑固さにはかなわない

預言者は、どんなにイスラエルやユダがダメになっても、決してそれでもって神さまの大計画がダメになるとはしない。どのような現実を通して、必ずイスラエルを通して救の音信が来る。イスラエルやユダが滅びても。パウロにおいてもそうでしょう。異邦人に福音がまず行くようになって、ユダヤ人は一向にキリストを信じないんだからね、今でも。なかには改宗するものもいるけれどもさ。頑固なんだよな、頑^{かたく}なうなじこわき民なんだ。それよりもまだ頑固なのは神さまの救いなんだ。神さまの頑固さにはかなわない。神さまの救はどこまでも追求していく。我々は、

「求めよ、さらば与えられん」

というけれども、神さまの方から求めて、

「お前にこんなに無条件に与えようとしているのに、何をやっているか」

というわけだ、神さまの方では。

「なにモサモサしているか。あるがままで飛び込んでこい。なにも準備はいらんぞ」

と。あんまり体裁がよすぎるよ、今のキリスト教は。いろんな条件が付きすぎる。みんなセクシヨナリズムになって、信条主義に、形式主義になってしまっている。それで、内村先生が「無教会」なんてことをおっぴらじめた。けれどももう、内村先生の無教会も歴史的な意味と役割は済んだ。だから、

「いわゆる教会、無教会ではないぞ」

と。内村先生はもうちゃんとそこまで見てますよ。

「そんな相対的なことを言っているうちはダメだ。どれだっている。問題は、本ものを受けとるかどうかなんだ。カトリックだろうと何だっているよ」

と。カトリックの中の神父さんにはえらい人がいますよ。カトリックだからどうだなんて、そんなことは絶対に言えない。問題は、神さまの目からみて、

「お前は本ものだ」

というところに入っていかなかったらしょうがない。人の判断なんかどうだっていい。何と思われようと、何とけなされようと。そうでしょ。

「お前たちの熱心がする」
と書いてありますか。



「万軍のエホバの熱心、これを成したもう」

と。キリストの熱心がこれを成してくださる。キリストの力が、愛が、光が、生命が、知恵が、これを成したもう。

「汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて我らの智慧と義と聖と救贖^{あがない}とになり給えり」(コリント前1・30)

「キリストは我らの聖と義と贖いとに成りたもう」

とパウロも言っているではないですか。それは誰かということ、

「ひとりの嬰兒が我々のために生まれて、エホバの熱心はこの一人の嬰兒に表れて、

平和の君となり、大能の神とまで、天界に王の王となつて」

という、これが預言ですよ。ついにもの凄い、終末の光の世界に爆発している預言です。

そういうことで、私たちはこのイザヤの言葉も行為も、この歴史的な事態もみな、新約の光で見えていくと、いろいろな私たちに對する警告ともなり、また励ましの言葉ともなり、力ともなつて進んで行きます。終ります。

● 祈り

祈ります。

主さま、このイザヤ書、インマヌエルの音信をはたと受けとり、「シエヤール・ヤーシューブ」(遣れる者は帰りきたらん)の音信をまた深く受けとり、ありがとうございます。私たちもまた、あなたに御国のために遣されたる者として、いよいよ御前に帰りゆき、あなたのみ光の中に祈り入り、全身にみ力をいただき、全身をみ光で貫かれ、全身にあなたの愛の血が流れ、感謝いたします。言うことはありません。どうぞ、私たち自身があなたの証者とされますように願ひ奉ります。こちら側の状態はどうであつてもいいです。ただあなただけです。かくして、私たちは変えられていきます。本当に感謝いたします。

今、兄弟姉妹たちと共にこのようにして第一回の集會を、聖名にあり、聖名のゆえに終えることができ感謝いたします。どうぞまた、今晚、深くあなたのみ腕の中に休らい、また、明朝はあなたの中に祈り入り、そして、第二回の集會を迎えることができますように。来れなかつた兄弟姉妹たちは、それぞれの所において一つとなつておりますが、どうぞ、彼らをそれぞれの所において恵みたまわんことを願ひ奉ります。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讚美、祈り、聖名により捧げ奉る。アーメン。

